

## 国民保導連盟地方組織の幹部構成について

——慶尚南道連盟および釜山連盟の事例を中心に——

崔 仁鐵

### はじめに

韓国<sup>(1)</sup>では、植民地支配からの解放以降、朝鮮戦争に至るまで多くの民間人虐殺が行われた。それは一九四六年一〇月人民抗争、一九四八年四・三濟州島事件、一九四八年麗水・順天事件(以下、「麗順事件」と略す)、朝鮮戦争時期の民間人虐殺事件などであり、数多くの犠牲者が発生した。その中でも一つの事件として最も多くの犠牲者をもたらしたのは、国民保導連盟事件である。国民保導連盟(以下、「保連」と略す)は、一九四八年一二月に施行された国家保安法により大量に生み出された「左翼

犯」<sup>(2)</sup>を転向させ、保護・指導するという趣旨の下、国民の思想統制という目的で一九四九年四月二〇日に結成された。なお、保連は国の行政組織ではないが、実際には国家による完全な統制を受けていた。保導連盟員(以下、「保連員」と略す)の数は定かではないが、全国各地で最低十万人から三十万人に達していたともいわれる<sup>(3)</sup>。一九五〇年朝鮮戦争勃発後、六月末から九月にかけて保連に加入した人々が軍隊・警察によつて全国各地で大量虐殺された。韓国政府は保連員たちを召集・拘禁し、戦況が不利になると彼らを集団虐殺したのである。戦争中、北朝鮮に協力するのではないかという憶測が虐殺をもたらした。犠牲者は数万名ともいわれる。これが保連事件

である。

左翼犯に対する転向政策は、解放後にはじまったものではなく、植民地期に遡る。したがって、保連は植民地支配との連続性の下で議論をしなければならぬ。一九三七年、日中戦争が起き、日本は朝鮮の転向者を思想報国戦線に動員するために一九三八年七月二四日「時局対応全鮮思想報国連盟」（以下、「思想報国連盟」と略す）を結成した。この団体の目的は、軍慰問訪問や国防献金のような活動および非転向長期者を抱き込むための座談会の開催などの活動をし、究極的には「皇道宣揚」・「内鮮一体」<sup>(4)</sup>を強化することであった<sup>(5)</sup>。保連と思想報国連盟は左翼転向者を対象としており、団体の性格上、左翼勢力に対する「善導」、「保護」を標榜していたという観点では、組織の性格は似ていると言える。違いは、思想報国連盟は転向者を加入対象にした反面、保連は転向者の加入にとどまらず、個々の反政府運動の間の連携をさまたげると同時に思想の組織的統制をしようとしたところであると思われる<sup>(6)</sup>。戦時体制期に入った一九四一年一月日本は、思想統制を強化するため、思想報国連盟を発展的に解散した後、財団法人「大和塾」に統合した。大和

塾は日本精神の養成と「内鮮一体」の強化、転向者の「善導」・「保護」を主な事業としていた<sup>(7)</sup>。

保連研究として先駆的ともいえる韓知希の研究では、保連設立は、李承晩政府が国民に反共イデオロギーを盛り込ませることによつて、民衆の支持のない李承晩政権を強化することにその目的があつたと説明している。

これを裏づけるため、保連中央組織の結成の背景と過程を分析した<sup>(8)</sup>。次に金宣浩は、保連の地方組織の結成と加入者の分析を通じて保連の実態を明らかにすることを目的とした。地方組織の結成後、保連員が増えることによつて民衆の反政府化を防ぎ、日常的思想統制団体に變化したと主張した。また、加入者が属していた団体（南朝鮮労働党など）を明示し、保連の実態を従来の研究より明らかにした<sup>(9)</sup>。ただし、幹部構成員については実証的に十分に論じられていない。鄭秉峻は、保連虐殺について偶発的な事件ではなく、虐殺が事前に計画され、実施されたと主張する。つまり、鄭は保連虐殺について米国の情報機関などが虐殺の計画を事前に認知していたと主張し、事件の責任究明に力を注いだ<sup>(10)</sup>。カン・ソンヒョンは、保連事件で国が「アカ」を誕生させ、彼らを韓国内部の

敵だと設定し、絶滅すべき存在とされたのが虐殺の一番大きい理由だと分析している。彼の研究の中で注目すべき点は、植民地期から朝鮮戦争に至るまでの思想統制の歴史的な流れを保連と関連付け、保連組織には転向政策に内在している監視システムがあり、国家が個人の心の中を覗き、人々を判断する思想統制メカニズムがあったということである。<sup>(11)</sup>

保連事件研究における大きな成果としてあげられるのは、「真実・和解のための過去事整理委員会」（以下、「真実委」と略す）であろう。真実委の活動は、保連事件の真実を究明する目標を掲げ、多くの事実を導き出した。<sup>(12)</sup>

まず、保連事件に関して真実委は、全国的な調査を実施した。しかし、虐殺の真実究明に調査の焦点が当てられており、保連の組織構成については実証的に十分に深められていない。真実委報告書は、保連中央本部（ソウル中央・上層部の数名の分析はしているが、地域保連の幹部構成員については十分に分析していない。また、史料状況にも規定されて地域別の報告書の水準にはかなり大きな精粗の差があり、各地域に即した研究を、幹部構成員分析などを含めて深める必要がある。真実委は多くの真実

を明らかにし、国家の公式記録と反省という点においては注目に値するものの、課題を残しているのである。

以上のように、これまでの研究は虐殺事件そのものの真相究明に力を注いできたが、そもそも虐殺が行われた保連組織自体の分析は不十分である。特に、地方組織の幹部構成員については、実証的に明らかにされていない。保連の組織構成、特に地方組織の実態については左翼活動経歴のある者や左翼犯が組織化されたという程度の漠然とした指摘にとどまっており、具体的に論証されていないのである。そこで、本稿では、政治史研究の基礎作業として地方組織の幹部構成員の分析など詳細な実証研究を行う。

数少ない地域保連の人物研究として、金ジユワンが慶尚南道（以下、「慶南」と略す）馬山地域保連を主な対象として検討している。金はまず、加害者側である地域警察、有力者、右翼団体、軍隊指揮官を対象として分析を行った。被害者側の分析としては、遺族の証言と一九六〇年代における遺族会を中心とした虐殺の責任追及の活動を詳しく紹介した。しかし、金の研究も他の既存の研究同様に保連組織の幹部構成員についての検討はほとん

ど行っていない<sup>(14)</sup>。特に、保連事件の被害者の場合、左翼経歴者が大多数であったが、保連幹部構成員中、左翼系人物に関する研究は皆無に近いといえる。虐殺展開過程の実証と責任究明は極めて重要であるが、虐殺が起きた組織の人的構成について具体的な検証を行うことで、保連事件についてより深く理解することができるようになるのではないかと考える。

本稿は、慶尚南道国民保導連盟（以下、「慶南保連」と略す）及び釜山市国民保導連盟（以下、「釜山保連」と略す）幹部構成員の分析から保連組織の具体像に迫ることを目的とする。これまでの研究は、保連の団体としての性格を左翼の転向団体として規定してきた。ただし、転向させられた左翼とされている人々の実像はこれまでに述べてきたように明らかにされておらず、特に解放前の経歴を踏まえて論じられていない。解放後につくられた保連が当時の韓国社会でもったインパクトを理解するためには、植民地期以来の経歴を分析する必要がある。ともう一つ、植民地期以来、独立運動・社会運動にとりくみ、社会的にも知名度を有してきた人々が、転向させられ、反共宣伝に動員されたということを意味するからで

ある。単に解放後に左翼が転向させられたという次元にとどまらず、独立運動・社会運動の歴史的経験が反共宣伝の強化に動員されたということなのである。したがって、植民地期の幹部構成員の経歴を踏まえること無くしては、保連が果たした役割を解明することはできないのである。

保連事件は朝鮮戦争勃発後、韓国の全地域において引き起こされた事件だが、本稿は慶南保連・釜山保連の構成員を対象とする。慶南・釜山地域は、虐殺の被害がもつとも酷かつたためである<sup>(15)</sup>。釜山は、戦時臨時首都であったため、保連員や要視察人、反政府人物に対する監禁が広範囲に行われた。慶南・釜山地域以外における虐殺は、朝鮮戦争初期の要視察人や保連の幹部級人物の殺害を除けば、北朝鮮軍の南進と韓国軍隊や警察の後退が行われた時期に集中して発生した。一方、慶南地域では、洛東江防衛ラインが形成された一九五〇年八月初め以降にも多くの犠牲者が発生した。人的・物的資源を集中させて「予備検束<sup>(16)</sup>」が他の地域よりはるかに体系的かつ組織的に行われたことが、釜山・慶南地域の特徴といえるだろう。

以上を踏まえ、本稿は慶南・釜山保連幹部人物らが解放前にはどのような活動を行い、どのような思想を持っていたか、また解放後から韓国政府樹立、朝鮮戦争に至るまでの活動を調べ、その活動が保連といかなる関連性があるのかという問いを設定し、慶南・釜山保連組織の実像を具体的に示したい。本稿の資料としては、まず個人の回想録と新聞を中心に分析する。個人の履歴を調査するために、韓国国家記録院の資料<sup>(7)</sup>を参考するとともに、真実委の報告書を参考にする。新聞は、解放前の時期は『東亜日報』、『朝鮮日報』などを中心に、解放後は、『京郷新聞』と釜山地域の地域新聞である『民主衆報』と『釜山日報』を中心に参考する<sup>(18)</sup>。新聞の出所は本文に表記し、次の通り略記する。『東亜日報』→『東亜』、『朝鮮日報』→『朝鮮』、『京郷新聞』→『京郷』、『民主衆報』→『民衆』、『釜山日報』→『釜山』。新聞の発行年の表記は、一九〇〇〜九九年については下二桁だけを表示する。

## 一 保連設立の社会的背景と性格

以下では議論の前提として、保連の概要について簡潔

に整理しておきたい。

保連結成の最も大きなきっかけは、韓国政府樹立の約二ヶ月後に発生した一九四八年一月一九日の麗順事件であった。これによって、韓国政府は韓国内部に多くの左翼勢力が潜んでいると判断し、左翼への弾圧を始めた<sup>(9)</sup>。このため韓国政府は、一九四八年一月二〇日に国家保安法を国会で可決させ、一月一日に法律第一〇号として公布した。「反国家団体」を構成した者だけでなく、加入した者まで処罰できる根拠を作った<sup>(20)</sup>。このような経緯で作られた国家保安法は、大量の左翼犯を作り出し、多くの刑務所が収容能力の二倍を超える事態に至った。収監者の約八〇％は、国家保安法違反者であった<sup>(21)</sup>。左翼犯には処罰が最善の方法ではないという判断の下、多くの政治犯に対する管理や処罰の効率化の一環として矯正・教化を図るとして創設されたのが保連であった。左翼犯や転向者を啓蒙・指導し、韓国の国民としての道を歩ませることが目的とされた(『東亜』49/4/23)。つまり、国が左翼転向者を管理及び統制する団体だった。保連は国家保安法制定四ヵ月後の一九四九年四月二〇日に結成された<sup>(22)</sup>。保連は「大韓民国政府の絶対的な支持」「反北

朝鮮・反共闘争」「南・北労党破壊」に邁進することを綱領として明らかにしている（『東亜』49/4/23）。保連員は、原則として国家保安法に違反する人々のうちの転向者とされた。

不法団体<sup>(23)</sup>として判断された団体に加入した者以外でも、保連の加入者には、左翼からの転向者だけではなく左翼思想とは関係のない多数の一般人がいた<sup>(24)</sup>。この点は、幹部構成員の詳細な分析をおこなう本稿の課題とは直接的にはかかわらないが、保連の性格を理解する上では重要なので、簡単に言及しておきたい。その一般人の例としては、慶南馬山地域では、校内秩序紊乱などの理由で退学処分を受けた学生らも保連に加入させられたケースもあった。また、各地域の警察に加入人員が割り当てられた場合も多かった。固城地域では二十三十代は無条件に加入対象だった。そして、警察や右翼青年団が左翼活動とは関係なく、私的感情によって強制加入させた場合もあった。例えば、慶尚南道の金海郡進礼面の大韓青年団は、気に入らない人や右翼団体と仲が悪い人、また知識人などを保連に強制的に加入させた。このように大韓青年団員の私的感情によって保連加入が決められた場合

もあった<sup>(25)</sup>。

また、転向した後、保連に加入したからといって、敵ではない国民として政府は受け入れたわけではなく、一定の審査期間ないしは検証を経なければならなかった。

一般的に、左翼犯が保連員に加入するためには必ず「良心書」を提出しなければならなかった<sup>(26)</sup>。一種の供述書であつてこの良心書には、自分が関与した左翼組織の構成員の名前を全て書かなければならず、一人の転向者ごとに五から一〇人ほどの組織員を自白させられた。良心書の内容の検証は、転向者が提出したリストを確認する方式で行われ、検証期間は加入後一年間であつた<sup>(27)</sup>。

保連の全国化は、設立当時から計画されていた。創設直後に立てられた組織戦略によると、ソウル市連盟は一九四九年五月までに組織作業を完了させ、その後各地域を巡回しながら保連の設立趣旨のもとに組織設立に取り組んでいくとされた。そして、組織に必要な核心人物を選抜し、これを基に一九四九年六月から八月までは京畿道・忠清道・江原道で、八月から一〇月までは全羅道と慶尚道での組織作業を完了させるのが計画であつた<sup>(28)</sup>。保連を最初から巨大な全国組織化する計画を見ると、当時、

表1 慶南保連組織図

役職名	名前
名誉理事長、慶南警察局長	崔喆龍
理事長、慶南査察課長	辛泳柱
幹事長	盧百容
事務局長	姜大洪
総務部長	成樂明
保導部長	林純也
宣伝部長	権一樵
組織部長	チョン・ホイル (전호일)
財政部長	田昌浩
事業部長	李ソンチュル(이성출)
訓練部長	趙大順
婦女部長	崔小男
幹事	文炳遠、張壽奉、李萬溶、金必蘭

出典：真実委『2009年下半年報告書』5巻、317頁、『釜山日報』1949年11月22日から作成。備考：金ギジンの研究では、幹事のうち1人に文炳ジョ(문병조)、組織部長に金ヒョイル(김효일)だと書かれているが、『釜山日報』1949年11月22日の記事では、上述のように文炳遠、チョン・ホイル(전호일)であった。

反共主義を時代的課題として捉えていたことがわかる。国民を真の反共国民とするために首都ソウルには中央本部を、地方には道連盟・市連盟・区連盟を設置した。

## 二. 慶南保連の設立及び構成員

ここまで保連の概要を述べてきたが、以上を踏まえて、慶南及び釜山における保連の組織実態について検討していきたい。ここでは、まず、慶南保連をとりあげる。

保連は、一九四九年九月二〇日から地方支部組織を作り始め、慶南連盟は一九四九年一月一日、慶尚南道警察局武道会館で臨時発起人大会を行った<sup>(20)</sup>。一九四九年一月二〇日午前一〇時三〇分慶尚南道国民保導連盟の公式的な宣布大会が釜山市中区大庁洞南一小学校で開催された。公式発足と宣布大会では保連員八〇〇人を含め約二〇〇〇人が出席した(『釜山』49/122)。表一は慶南保連の組織図である。以下、慶南保連の理事長から幹事までの人物の中で、経歴等が判明する者<sup>(30)</sup>についてその詳細を示し、慶南保連について考察していこう。

慶南保連の主な人物

◎崔喆龍（慶南警察局長）慶南保連名誉理事長

一九二一年一〇月二八日に慶南統営で独立運動資金を募集した疑いで、<sup>(31)</sup>一九二一年一〇月二九日統営で逮捕され、統営警察署から馬山刑務所、そして西大門刑務所に移監された。一九二二年二月八日に仮出所する。<sup>(32)</sup>彼は、馬山の地域社会で青年運動（馬山青年会総務部長）の活動をした（『時代日報』25/6/4）。一九二七年には、朝鮮日報の馬山支局記者、同年馬山青年同盟設立に参加し、執行委員として活動する。<sup>(33)</sup>一九二八年二月四―五日の両日、釜山国際館で慶南の記者大会が開催され、司会者として参加する。この時に臨時執行委員選挙があつたが、議長に盧百容、副議長に崔喆龍、書記は二人が選出され、そのうち一人が姜大洪であつた（『東亜』28/2/6、『中外日報』28/2/6）。<sup>(34)</sup>から、一九四九年一月に設立された慶南保連の名誉理事長崔喆龍と幹事長盧百容、事務局長姜大洪は以前から知り合ひであつたといふことがわかる。慶南保連の設立の際に盧百容が幹事長、姜大洪が事務局長となつたことは、昔からの崔喆龍との因縁が影響を与えたと推測できる。崔喆龍は、一九二九年には『朝鮮日報』の釜山記者となり、一九三〇年に新幹会馬山支

会でも活動した（『朝鮮』29/4/9）。一九三四年、慶南晋州での独立資金募集の事件で再び逮捕され、五年の懲役刑を受けることになつた（『東亜』34/2/4、7/8）。その後、解放に至るまでの経歴は不明である。

解放直後、建國準備委員会（以下、建準と略する）馬山市委員会に参加していたが、左翼的なイデオロギーに傾いていく建準から脱退する。建準から脱退した崔は韓民会の馬山支部宣伝部長を務めた。<sup>(34)</sup>翌年一九四六年八月に李承晩が発足した右翼系の団体である民族統一総本部馬山地域の事務局長として活動し、右翼青年団の組織建設に参加する（『朝鮮』46/8/26）。彼は植民地期には警察官吏として活動していないようであり、崔喆龍が左翼を弾圧する警察に入つた正確な時期と理由は把握できない。<sup>(35)</sup>任用時期から見れば警察に勤めた時期は、右翼青年団に携わつた米軍政時期からではないかと思われる。<sup>(36)</sup>

以上をまとめれば、崔喆龍は、植民地期に、盧百容、姜大洪とともに慶南地域で社会運動をしていたが、解放後には右翼団体に活動し、警察官になつた。彼は、解放後には、植民地期に彼と一緒に活動した人々と反対の道歩んでいき、むしろ、弾圧する立場に立つたのである。



◎辛泳柱<sup>(37)</sup>理事長(慶南巡察課長)一九一六年一〇月二日、  
一九七七年一月一七日<sup>(38)</sup>

朴喆奎の研究によると、辛泳柱は解放後、昌寧邑人民裁判の対象者であったと指摘されているが、証言によるものか、依拠している史料は不明である<sup>(39)</sup>。解放後に人民裁判の対象になった正確な理由についての史料はないが、植民地時代の朝鮮で高等係警察官として独立運動家や一般の朝鮮人を弾圧し、昌寧地域の郡民の恨みを買った可能性が高い。辛泳柱の回顧録によると、彼は共產主義に対して極めて否定的な考えを持っていた。解放後、慶南地域における南労党の行動と左翼団体の活動を暴動だと認識しており、共產主義組織は民族に不幸をもたらすものだと思っていた。統営警察署における勤務期間がわずか一ヶ月である理由は、一九四六年一〇月に起きた大邱一〇月事件の影響で、統営の民衆に殴られ、入院したからである<sup>(40)</sup>。このような一連の事件が、辛泳柱に左翼に対する否定的な認識をもたらしたといえよう。

一九六〇年四月一九日革命以降、全国各地で朝鮮戦争期における民間人虐殺の真相究明の要求が高まり、同じく慶南地域においても真実究明要求が高まった<sup>(41)</sup>。一九六

〇年七月三十一日付『京郷新聞』によると、民間人虐殺と関連して郡民は辛泳柱への究明の要求とともに第五代国会議員の不正選挙を糾弾する激しいデモを行った(『京郷』60/7/31)。辛泳柱は、選挙管理員を買収し、人を動員して郡民を脅かした。それゆえ、辛は郡民に殴られ、入院することになる(『京郷』60/8/3)。また、郡民は郡民裁判(△君の上)に彼を立てせ、その周囲を郡民が取り巻いて行われたものを通じて、政界引退誓約をさせてから彼を警察に引き渡した(『京郷』60/8/7)。彼は選挙の前から戦争当時の虐殺責任で追い込まれていたもので、続けて国会議員になれば身分保障がされると思い、不正選挙まで行っていたと報じられた(『京郷』60/8/9)。彼は国会議員職を諦めなかった。不正選挙のため再選挙を実施することになった。その選挙に辛は再び出馬したのである。しかし、結果は落選であった(『京郷』60/8/18、19)。その後、彼は一九六三年民主共和党(略称は共和党)に入党し、再び昌寧地域の国会議員として当選する(『京郷』63/7/25、11/27)。本人が書いたのか、あるいは他人が辛を評価し、書いたのかは不明だが、辛氏の族譜である『辛氏慕先録』に書かれている辛泳柱の評価をみてみよう。

上記と重なっている内容は叙述を避け、比較する内容をたけを示す。

日帝下、独学で警部試験に合格し、警察の生活を始める。一九四七年一月、国立警察専門学校行政学科を卒業し、警察官として釜山と晋州などで保安(課長一引用者)と査察課長を務めた。一九五二年には、東亜大学の法政科三年を修了した。忠清南道警察局長が最後の公職生活であった。その後、四代から六代まで国会議員として勤めた。一九六五年四月には共和党政策委員長、農林分科委副委員長を務めている。一九六六年七月には南旨学園理事長を務め、一九六七年には再び国会議員選挙に出るが、落選する<sup>(42)</sup>

上記の『辛氏募先録』には国会議員を四代から六代まで勤めたと書かれている。しかし、彼は実際には四代と六代の国会議員だった。彼の回顧録には、第五代国会議員事件不正選挙に関して、ライバルである民主共和党候補が投票用紙を燃やしたり、暴力行為を行ったと書いてある。つまり、自分が当選者であり、相手候補者の不正行為と暴力行為によって自分が国会議員職を奪われたと

感じていたようだ。自分の選挙不正行為に関しては被害者意識で事件を眺めており、朝鮮戦争虐殺の責任に関する話は一切ない。そして、辛泳柱自身が保連に関して言及したことはほとんどないが、彼の回想録では朝鮮戦争後、政治工作員が後方攪乱を図っていた。工作員と保連員が会うことを防ぐため、保連員を予備検束したと語っている。また、彼の回顧録では予備検束した保連員は一人の犠牲もなく、すべて救済したと自画自賛していることが特徴的である。<sup>(43)</sup> 彼は慶南道警察局査察課の所属であった。その彼が保連員虐殺を知らなかったというのも矛盾であろう。<sup>(44)</sup>

◎盧百容(慶南道保連幹事長)一八八四年〜一九六一年八月一三日

『釜山市史』四巻によると、根拠は提示されていないが、盧百容は左翼人物と分類されている。<sup>(45)</sup> その根拠は、彼の経歴のためだろう。盧百容は、一九二一年には金海青年会長を、一九二三年には金海教育会代表として<sup>(46)</sup>、一九二七年には金海農民連盟代表として活動していた(『東亜』27/12/8)。また、一九二五年夏、慶南地域が台風の被害を受けたのだが、復旧作業をする際に、盧百容は救済活

動に乗り出すなど、社会活動に積極的だった（『東亜』35/9/16）。第三次共産党事件で、盧百容は姜大洪とともに検挙されるが、盧百容は予審終結で犯罪の嫌疑がないということで免訴された。一九二九年一月一〇日に釈放された（『東亜』29/11/2、14）。一九三〇年にも農民運動や社会運動を継続し、同年一月九日には新幹会中央検査委員に選出される（『東亜』30/4/14、11/11）。しかし、その直後、盧は再び恐喝・脅迫の容疑で逮捕され投獄、一九三二年一〇月一九日に出所する（『東亜』30/11/23、32/10/22）。

一九四五年には、建準慶南委員長、慶南道人民委員会副委員長を歴任した。一九四六年二月には慶南道民主主義民族戦線総書記に選出される<sup>(47)</sup>。一九四六年四月一日、民間団体が政府を「僭称」したという理由で盧は逮捕される。しかし、逮捕された者の内訳をみると、右翼系団体はなくすべて左翼系団体の人物だった<sup>(48)</sup>。これは恐らく米軍政の左翼勢力に対する弾圧であろう。

一九四九年十一月、慶南保連が設立される頃、『釜山日報』は尹一・盧百容・朴日馨などが、左翼系列の人物だと示しながら、彼らの自首によって、今後思想転向者が

多くなると予測している（『釜山』49/11/12）。尹一は、盧百容・朴日馨と共に保連に加入するが、幹部職に就いていない。保連の幹事長職は、元左翼系の中から著名な人物を選任し、左翼系に宣伝し、効果を高める重要な役割であったと考えられる。このような意味からすると、慶南の保連の幹事長は盧百容ではなく、尹一に任せる方が左翼系列へのより大きな宣伝効果があったのではないだろうか。なぜなら当時、盧百容より尹一の方が慶南地域においては左翼系の人物として影響力のある人物であったためだ<sup>(50)</sup>。しかし、実際には尹ではなく盧が幹事長になったのだ。それは、崔喆龍と盧百容の因縁が理由ではないかと思われる。盧は、保連に加入して転向活動をしたことは間違いないが、彼がどのような活動をしていたか具体的内容については分かっていない。慶南保連の宣言大会で行った盧百容の開会の辞がある（『釜山』49/11/22）。以下はその開会の辞の要旨である。

国民保導連盟慶南連盟は、本月九日から組織に着手し、檢察・警察両当局及び官民有志の積極的な支援のもとで、本月二〇日結成宣言大会を終わらせ、今のところ、連盟事業推進に努力しています。〔中略〕

共産分子自首期日の最終日である一月末日も差し迫りました。「中略」共産主義者の欺瞞謀略に騙され、山野に散らされ、潜在した者や各所の地下組織に妄動する者は、この自首期間日までに一日も早く大韓民国に戻るよう、衷心より願います。(後略) (『民衆』49/11/25)。

このように彼は、左翼の代表として左翼系の人々に保連加入を呼びかける開会の辞を発表した。しかし、盧のこうした保連の転向政策への協力にもかかわらず、朝鮮戦争勃発後の一九五〇年八月二二日、人民軍に協力する計画を持っていたという疑いで逮捕される(『釜山』50/8/30)。盧の人民軍に対する協力計画に対する事実確認は不可能であるため、犯罪成立の可否も確認できない。盧百容の死については、解放後韓国で左翼活動をした高性華<sup>(51)</sup>の備忘録では、釜山刑務所で死亡したと書いている。しかし、「韓国歴代人物総合情報システム」によると、盧百容は、実際は刑務所で死亡したのではなかったようだ<sup>(52)</sup>。

◎姜大洪(慶南保連事務局長) 一九〇四年〜一九五一年。

釜山刑務所 所で死亡と推定

一九二三年九月、日本に留学していた姜大洪は、関東

大震災によって朝鮮に帰還する(『東亜』23/9/17)。慶南社会運動者同盟発起大会委員として参加するなど慶南地域における地域社会運動家として活動する(『東亜』25/2/18)。一九二五年一月には、『東亜日報』慶南進永支局で活動、慶南青年準備委員会常務準備委員になる(『東亜』25/12/10、29)。一九二六年一月に『東亜日報』釜山支局の記者になる(『東亜』26/12/22)。釜山で記者生活をしながら釜山青年委員会臨時書記活動を行う(『東亜』27/8/3)。一九二七年二月二九日、釜山青年同盟会館で開催した新幹会釜山支会定期大会で姜大洪は、政治文化部の幹部に選出され、その後、一九二八年二月には慶南の記者連盟大会で臨時書記に選出される(『東亜』28/1/3、2/6)。一九二九年六月四日、『東亜日報』記事によると姜大洪は、一九二七年の第4次朝鮮共産党の慶南連絡係になったという(『東亜』29/6/4)。一九二九年に治安維持法違反で逮捕される。刑務所では胃関連の病気で苦勞をする(『東亜』29/11/2、11/6)。一九三二年一月八日姜大洪は、満期出獄する<sup>(53)</sup>。一九三九年七月に『東亜日報』釜山支局長になる(『東亜』39/7/9)。解放後、姜大洪は釜山における慶南建連の総務部長<sup>(54)</sup>、解放後の不安定な社会

情勢に対応するため、自生的に作られた治安隊の治安隊長を担当する<sup>(55)</sup>。信託統治反対人民大会準備会総務部長<sup>(56)</sup>、釜山市人民委員会代表（『民衆』45/12/24）と民主主義民族戦線釜山市委員会副委員長及び中央委員を務める（『民衆』46/2/2、2/19）。高性華の備忘録によると、姜大洪は朝鮮戦争勃発後、釜山刑務所に収監された時、転向を勧める放送をし、「共産主義は世界を救える思想的代案ではない」と刑務所の収監者たちに呼び掛けたという。このことで高性華は姜大洪を裏切り者だと考えていた<sup>(57)</sup>。『釜山日報』二〇〇八年一月一日には姜大洪の息子（姜セギユガセユ）にインタビューした記事がある。記事によると姜大洪の戸籍上の名前は姜大洛だという<sup>(58)</sup>。彼は朝鮮戦争勃発後防諜隊に逮捕され、釜山刑務所に収監される。釜山刑務所で一九五一年三月に病死したという（『釜山』2008/11/15）。

慶南保連の幹部のうち、崔喆龍・辛泳柱・盧百容・姜大洪以外、経歴が確認できた人は成楽明・林純也・趙大順の三人である<sup>(59)</sup>。林純也・成楽明は、経歴から見ると左翼活動をしたと思われる。訓練部長趙大順は、朝鮮民族青年団影島区団長も歴任したことから、右翼活動をして

いたと推測できる。また、宣伝部長権一 に関しては、詳しい経歴についてはわからないが、『釜山日報』記事によると南労党・人民党・人民共和党・新民党・社労党・勤民党・全評・農委・出版労組・海員同盟等の民戦傘下の政党団体員に対し、保連への加入を勧めていた（『釜山』50/1/10）。

以上、経歴が判明する慶南保連の構成員について述べてきた。これを踏まえて考察すれば、次のとおりである。まず、明らかなのは、名誉理事長・理事長といった組織のトップを警察官が占めていたことである。崔喆龍は、解放前は独立運動に関わっていたが、解放後は警察官として活動した。また、辛泳柱は植民地期と解放後に警察として活動し、共産主義が危険だと認識していた人物である。後日、彼は国会議員になる。

一方幹事長以下には、左翼系人物が組織されていた。盧百容は、植民地朝鮮で社会主義運動家であり、解放後にも建準、民主主義民族戦線などの団体で社会運動を続けていた。彼の保連における役割は幹事長であったが、対外的にはどのような役割を果たしたのかはわからない。しかし、盧百容は、共産主義活動を持続的に行ってきた

人物だが、保連に加入して以来、共産主義非難声明を発表し、左翼系にむかつて保連への加入を勧めた。姜大洪も釜山刑務所の中で、転向を宣伝する放送をしていた。

釜山・慶南地域で社会主義運動を続けてきた姜大洪・盧百容は、解放後釜山地域で左翼活動家として有名な人物であった。<sup>(60)</sup> 彼らが転向を表明・宣伝したというのは、

刑務所や外部の左翼には衝撃的な出来事だっただろう。幹事長以下の幹部保連員は保連に協力し、転向活動に協力したが、彼らは朝鮮戦争勃発直後、逮捕され、釜山刑務所に収監される。幹事長盧百容は、刑務所で死亡していなかったようだが、事務局長姜大洪の場合は、一九五一年刑務所で病死する。また、本稿で確認した総務部長成榮明、保導部長林純也の逮捕の有無や死に関しては確認できなかったが、高性華の証言<sup>(61)</sup>によると、金一粒(釜山南区保連幹事長兼総務部長)以外の保連員は全て死亡したとされており、このことからみると、朝鮮戦争期に死亡した可能性が高いとの判断の方が合理的ではないだろうか。

以上から、慶南連盟は警察の主導権の下、左翼系の人物が組織化され、宣伝活動に利用されたことが明らかで

ある。なお、左翼系人物の組織化にあたっては、名誉理事長の崔喆龍の植民地期以来の人脈が活用されたと推測することができる。

### 三、釜山保連の結成及び構成員

ここでは、釜山保連の幹部構成員について議論をした

い。釜山の保連は慶南保連の下部組織に位置づけられたため、慶南保連の結成時期よりやや遅れて結成された。釜山地域の保連は、一九四九年一月二日から二四日にかけて四つの地域に分けて作られた。まず、北釜山保連は一九四九年一月二四日に第一劇場で結成された。参加人物及び役員は、姜信昌(理事長、北釜山警察署長)、朴在元(常任理事、北釜山警察署警察係長)、金載楮(理事、巡察刑事主任)、申學雨(幹事長、鄭源表(総務課長)、吳載寅(組織課長)、鄭泰燮(宣伝課長)、金香子(婦女課長)、金智泰(顧問)、朴インジュン(参事、警察組織である釜山鎮区出張所長)、幹事は、朴明・姜在殷・千世旭・梁達錫・金在文・李泰根・李明奎・韓楠・丁定燮・権隆一で構

成された。結成大会後、午後一時市街行進行事を行った（『釜山』49/12/25）。多くの人数が参加しており、理事長と常任理事など社会の各層が集まった。街頭行進までしたことから見ると、保連の宣伝効果を高めるための行事ではないかと推測される。

表二からわかるように、北釜山の場合、常任理事姜信昌・朴在元・金載梧は、解放後に警察官として活動していた。特に、朴在元は、植民地朝鮮で高等警察部門において活動した。『支那事変功労者功績調書』によると、軍需品輸送に関する警備と防空防備業務の功労を認めてもらった。幹事長申学雨は、解放後、民主主義民族戦線と全国人民代表者大会慶南居昌委員会の活動をした。金香子は朝鮮婦女同盟慶南支部で男女平等と選挙権、女性の経済的独立を主張するなど社会活動をした。

以上から理事長や理事を警察官が占め、幹事長以下が左翼系によって組織されている点が確認できる。

次に南区保連は、北釜山と同じ日一九四九年一月二四日に釜山駅前公会堂で結成された。郭斗金(常任理事兼財政部長)、金一粒(幹事長兼総務部長)、金常春(保導課長兼幹事)、王俊根(宣伝課長)、金一守(組織部長)、幹事

は金東山 李赫 崔俊英 盧再鉉 申在鉉・高明哲 金雨英である。<sup>(62)</sup>

表三によれば、郭斗金は、植民地朝鮮で高等警察部門において活動したことが目立つ。なお、釜山南地区幹事長金一粒は、ふだん査察係職員たちと一緒に旅行に行くほど親しい関係であったという元警察官の証言がある（『釜山』2001/4/17）。金は民主主義民族戦線宣伝部長の活動時期（一九四六年）に、慶南地域において左翼活動で警察に逮捕された地域別人数を当時ソ連の方に報告していた記録がある。誰にどのような方法で報告したのかに關しては具体的に明示されていない。<sup>(63)</sup> 高性華によれば、金は保連員のうち生き残った唯一の人物だったという。なお、金一粒は警察に左翼組織の情報を提供し、昼は外で活動、夜は刑務所に戻る生活したという。<sup>(64)</sup> 元警察官の証言や高性華の証言などを考えてみれば、金一粒の場合には解放直後は左翼活動をしていたが、韓国内で共産主義に対する弾圧が次第に強くなっていく中、転向したと判断できるだろう。金東山は、米軍政の顧問に任命されるが、その理由は彼のイデオロギーとは関係なく大衆から支持をえていたためと考えられる。民族革命党釜山支部

表2 北釜山保連の幹部構成員

名前	経歴	出典
姜信昌：北釜山保連理事長(北釜山警察署長)	坡州警察署長(1946年6月～1946年8月)、京城麻浦警察署長(1946年9月～1947年9月)釜山水上警察署長(1949年6月～1949年8月)、釜山東部警察署長(1949年8月～1950年5月)、釜山中部警察署長(1951年10月～1952年6月)、馬山警察署長(1950年7月～8月)、警察専門学校総務課長(1952年8月)	『東亜日報』1946年3月14日付、1949年4月18日付。『南朝鮮民報』1950年7月21日付。『京郷新聞』1952年8月2日付。内務部治安局、前掲、1973年、1347、1350頁。
朴在元(新井健友)：北釜山保連常任理事(北釜山警察署長査察係長)	慶南東? 1913年1月15日出生、釜山東? 高等普通学校卒業、慶南巡查(1933)、釜山警察署九徳交番巡查、釜山警察署多大里出張所巡查(1936)、釜山洲岬出張所巡查(1938～1939年12月まで)、釜山警察署高等警察係刑事(1941年12月～1943年まで高等刑事として活動。固城警察署長(1954年3月～1954年10月)、梁山警察署長(1954年10月～1958年8月)、金海警察署長(1955年8月～1957年2月)	親日人目録書編纂委員会『親日人名辞典2』民族問題研究所、2009、99頁。『民主衆報』1949年11月5日付。内務部治安局、前掲、1973、1398頁。朝鮮総督府『支那事変功労者功績調書』1940年、韓国国家記録院、CTA0003262。
金載楯(査察刑事主任)北釜山保連理事	平安北道出身(最終学歴：中卒)。解放後1948年警察幹部試験合格。馬山鉄道警察署捜査主任(警衛)、山清警察署長(1958)、金泉警察署総警(1960年5月～1960年7月)	『南朝鮮民報』1948年11月20日付。『京郷日報』1958年5月29日。総務省人事局人事課『総警任命発令の件』韓国国家記録院、1959、BA0087065。
申学雨(北釜山保連幹事長)	全国人民代表者大会代表慶南居昌人民委員、民主主義民族戦線慶南幹部1947年。	『民主衆報』1947年7月26日;金南植『南労党研究資料集2』亜細亜問題研究所共産圏資料叢書、125頁。
金香子(婦女課長)	朝鮮婦女同盟慶南総支部執行委員	『民主衆報』1946年2月25日付。

注：警衛・総警は警察官の階級名で、警衛は日本警察の警部補、総警は日本警察の警視正に相当する。



表3 南区保連の幹部構成員

名前	経歴	出典
郭斗金（常任理事兼財政部長）	咸陽警察署巡查(1934年～1935年) 咸陽警察署高等警察係刑事(1940年) 釜山水上警察署巡查(1941年～1943年) 釜山署査察係長(1949年11月5日) 居昌警察署長(不明～1950年8月) 河東警察署長(1951年11月4日～1952年2月2日) 咸陽警察署長(1952年3月3日～1952年5月12日) 山清警察署長(1953年1月～1953年6月) 淳昌警察署長(1953年9月～1954年3月)	『民主衆報』1949年11月5日付。朝鮮警察協会、前掲、1943、152頁。親日人名辞書編纂委員会『親日人名辞典1』民族問題研究所、2009、179。内務部治安局、前掲、1973、1373、1398～1399頁。
金一粒(南区保連幹事長兼総務部長)	朝鮮労働組合全国評議会釜山代表の代議員(1945)、米ソ代表団歓迎大会出席(1946)、信託統治排撃委員会宣伝部(1946年1月)、民主主義民族戦線慶南委員会宣伝部長(1946)、第2代全評釜山地方評議会委員長(1946)	『民主衆報』1945年12月24日付、1946年1月5日付、3月8日付。『釜山日報』2001年4月17日付
金東山(南区保連幹事)	釜山で医師として活動。解放後米軍政釜山地域顧問。1946年1月信託統治排撃委員会常務委員、民主主義民族前線慶南議長団委員、民族革命党慶南地区委員長。朝鮮戦争直後、防諜隊によって逮捕。	『民主衆報』1945年12月6日付、1946年1月5日付、3月20日付、8月20日付。『釜山日報』1950年8月22日付。

の結成準備委員会は金東山の家で行われた。結成日は一九四六年八月一日、場所は慶南中学校であった。この日、植民地朝鮮で武装独立団体の義烈団団長であり、民族革命党代表であった金元鳳も参加した(『民衆』46/8/9、10)。

南区においても、常任理事を警察官が担い、幹事長以下に左翼系が組織されていることが確認できる。ただし、金一粒は査察係職員とふだんから仲が良かったという情報があるなど、左翼の経歴こそあれ、警察側に接近した人物だったといえるだろう。

中影島(中区と影島地域を示す)の保連も、南区、北釜山保連と同じ日に結成されている。中影島保連の結成場所は港口劇場であり、役員の構成はわかる限りでは金基秋(幹事長)、趙平濟(総務課長)、李萬石(組織課長)、金昇萬(保導課長)、劉大洪(宣伝課長)、幹事は金相昆、盧義錫、車種元、鄭海永、金光遠、金吉燦という陣容であった(『民衆』49/12/27)。残念ながら、中影島保連の幹部については資料の限界上、理事長・常任理事等の職を誰が引き受けたのか、幹事長以下に就任した者の経歴についても調べる事が出来なかった。しかし、すべての

地域で警察官が幹部職を担当していた事実から考えてみると、地域の管轄警察署長が保連の理事職に就いたと推測できるだろう。当時の警察署長は田文淳である<sup>(65)</sup>。彼が理事職に就いたことは資料上では確認できなかったが、結成大会には参席した（『釜山』49/12/25）。

東萊保連は中影島、南区、北釜山よりやや早く結成された。一九四九年一月二日、東萊劇場で慶南連盟幹部と官公署長などが参加しており、朴日馨が幹事長を、李永錫が総務課長を務めた（『民衆』49/12/21）。朴日馨は、一九二八年東萊青年連盟臨時執行委員長、東萊労働組合委員長など植民地朝鮮で社会運動を展開した。一九二九年には新幹会東萊支会の幹事、『東亜日報』の記者として活動した（『東亜』28/7/4、8/15、29/1/12、24）。一九三〇年には東萊記者団委員長<sup>(66)</sup>などを務めた。朝鮮共産党再建に向けた赤色労働組合と赤色読書会事件の疑い（治安維持法違反、一九三二年）で西大門警察署高等警察係に逮捕、取り調べを受けた<sup>(67)</sup>。一九四五年には、信託統治反対人民大会準備会の宣伝部長、慶南人民委員会の宣伝部長、建準慶南指導部の宣伝部長を歴任した（『民衆』45/12/31）。朴日馨は、釜山地域の左翼系新聞である『大

衆日報』を創刊する<sup>(68)</sup>。慶南における保連結成の前に、慶南地方の左翼活動家が次々と連盟に自首する中、保連に加入した（『釜山』49/11/12）。

李永錫（東萊保連総務課長）は、一九二八年には東萊青年連盟委員、東萊労働組合委員及び一九二九年には執行委員長、一九三〇年には東萊記者団委員、東萊労働組合執行委員長など朴日馨と一緒に社会運動をした。東萊における言論弾圧糾弾大会（一九二九年）参加するなど、植民地期に社会運動を続けていた<sup>(69)</sup>。一九三二年に東萊労働組合と一緒に活動した仲間（金命龍）と共に赤友社事件（東萊で起きた共産主義関連の扇動ポスター作成及び流布事件）の関係で取り調べられた<sup>(70)</sup>。李永錫は一九三五年まで継続的に社会運動をおこなうことで、逮捕、裁判、釈放を繰り返す<sup>(71)</sup>。解放後は釜山地域で社会運動に参加する朝鮮人民報記者の資格で慶南記者会委員として活動する（『民衆』45/12/7）。

このような構成からなる釜山地域の保連は、思想宣揚大会や文化行事の開催、軍隊と警察に慰問品を送るなどの活動をした。一九五〇年三月、釜山地区は中央最高運営委員会の指示に従って区内の各学校に学生班を設置し、

「民族意識の高揚と国民思想善導のために」というテーマで地区の幹事長らが、慶尚商業高校、釜山女子高校、釜山大学校、慶南中学校、釜山師大(現釜山教育大学)などで講演を行った(『民主新報』50/3/26)。また、慶南保連は、保連員を動員して各種の芸術行事を開き、思想転向運動を行った。一九五〇年三月二十九日から三十一日まで釜山劇場で、四月一日と二日は第一劇場で、それぞれ国民芸術祭典を開催して詩・舞踊・音楽など多様なジャンルの公演が行われた(『民主新報』50/3/26、29)。この芸術祭典の具体的内容は分からないため、活動に思想転向的性格があつたかどうかを把握することはできないが、一九五〇年一月八日から十日まで三日間開かれた保連中央本部の保連第一回国民芸術祭典の趣旨は左翼路線から転向した保連員たちが自分の能力を発揮するという趣旨であつた(『朝鮮』50/1/9)。当時の保連事業は、一般国民の興味を引くために大きな努力をしていたことがわかる。また、このような活動をするには、保連員の思想を改造し、既存の保連員を活用することで残存の左翼勢力を崩壊させる目的があつたと思われる。

## おわりに

以上、本稿では釜山・慶南保連の幹部構成員について具体的に明らかにしてきた。まず、保連の幹部構成員の分析から、保連は警察が主導し、左翼系人物を組織化したものだとは判断することができる。慶南保連の訓練部長趙大順は、右翼団体に活動したが、それ以外の盧百容、姜大洪をはじめとする各地域の幹事長と幹部は、釜山・慶南地域の植民地時代の社会主義運動活動家であり、解放後は釜山地域で左翼運動の指導層として、釜山における左翼活動を先導する人々であつたことを確認した。また、慶南保連の幹事長盧百容と事務総長姜大洪については、理事長崔喆龍と植民地時代に、ともに社会運動や独立運動をした縁が、解放後、慶南保連における彼らの地位に影響を与えたと判断できるだろう。

地域における著名な社会運動家が保連に加入し、社会主義や共産主義を排斥する運動に参加する意味は、盧百容の声明書と姜大洪の釜山刑務所での転向の弁からもわかるように、保連の宣伝効果をより高めるものだった。

これまでの研究では、保連は左翼犯の転向団体として位置づけられて来た。ただし、本稿の分析が示すように、保連が果たした役割はそれにとどまるものではない。本稿は、解放後のみならず、植民地期以来の経歴を踏まえて幹部構成員を分析した。その結果、植民地期に独立運動・社会運動の経験を有し、社会的にも知名度の高かった人々が、保連に組織化されたということが明らかにあった。保連は単に解放後の政治空間において左翼とされた人々の転向団体という次元にとどまらず、植民地期以来の独立運動・社会運動における人的結合（あるいは人脈）を反共主義に動員するものであった。

いったい、何が、地域における有力な左翼系活動家に社会主義ないし共産主義思想を非難させたのだろうか。また、彼らの考えを変えたのだろうか。解放後の朝鮮半島が、独立国家建設への挫折や赤狩りの中で、自分の身を守るために保連への加入と転向をした可能性が考えられる。加えて、朝鮮半島の南と北が現実的に分断され敵対的關係に置かれている状況下で社会主義運動がこれ以上は不可能であると判断したことと当時の自分の仲間たちが続々と保連に加入したことも加入への動機となった

のではないだろうか。さらに、国家保安法体制の韓国の実態も無視できない。韓国の国家保安法体制下における社会・共産主義運動が、刑法で処罰される非常に危険な行為になったことであろう。

本稿で具体的に確認したように、保連地方組織の幹部らは、慶南保連設立から朝鮮戦争に至るまでは反共主義や保連宣伝に活用されたが、戦争勃発後彼らは潜在的な敵とみなされ、予備検束された。これは朝鮮戦争勃発前の韓国政府の転向政策において、保連員らを転向の対象者として認識しつつも、保連員への信頼感はなく、絶えず間なく潜在的な敵として認識していたということである。朝鮮戦争が、韓国政府の保連員に対して抱いていた認識を表面化する契機になり、保連員は転向の対象ではなく、処理（虐殺）の対象となるきっかけともなったのである。保連の組織化は、保連員を転向させ、反共主義に動員する政策であったといえるが、反共主義を唱える政治的・社会的な基盤が極めて薄弱であったということである。果たして、釜山・慶南保連の幹事長以下構成員が国家を覆し、内乱を目的とした共産主義者ないし社会主義者であっただろうか。彼らは、共産主義者及び社会主義者

であったことはいうまでもないが、多くは抗日運動、新幹会、社会運動と、解放後釜山においては、建準、民主主義民族戦線、親日派を排除する社会運動を続けた人物でもあった。しかし、政治イデオロギー対立を勝ち抜いた韓国の政治集団は、彼らを絶滅すべき存在として扱った。

最後に、保連組織の理事長以上の役職者は保連組織を通じて植民地期と同じく解放後の韓国においても再び登場し、左翼勢力を弾圧する立場にいたことも確認した。

こうした点を論じたことは、保連の植民地期との連続性について従来よりもミクロなレベルで明らかにすることに貢献できたと考える。慶南保連の査察課長であった辛泳柱以外には、虐殺に対する責任を問われた者はいない。

これは釜山・慶南保連の理事長職以上の役職を持つ人々は、地域社会において富と権力を維持してきたので、責任をとれなかつたのだろう。こうしたことは、地方組織の詳細な人物分析をしたからこそ、明確になった点である。

理事職以上の警察官は、保連虐殺に具体的にどのような役割を果たしたのか。また、幹事長以下の左翼運動経

歴のある人々は、釜山・慶南において保連でどのような具体的な役割をはたしたのか。これらの問題についてはまだ解明されておらず、研究の余地がある。例えば、植民地朝鮮で独立運動と社会運動をした崔喆龍が、どのような経路を辿り、解放後右翼団体に加入して、米軍政時代に警察官に任命されたかなどは究明されるべき課題である。また、保連自体の日常的な活動がいかなるものだったのかについても、地域の実情を踏まえて検討される必要がある。最後に、植民地期の思想転向団体である「時局対応全鮮思想報国連盟」、「大和塾」と保連の連続性に関しても、それぞれの団体の活動等をより具体的に明らかにし、比較検討する必要がある。以上は今後の課題としたい。

#### 【注】

- (1) 一九四八年八月一五日、大韓民国政府が樹立されたが、本論文では解放後から「韓国」と呼称する。また、朝鮮民主主義人民共和国は「北朝鮮」とする。
- (2) 国家保安法が作られた一九四八年一二月以降、韓国では共産主義または社会主義思想を志向し、北朝鮮に同調す

る団体に加入すること、あるいは、こうした団体を作ることは犯罪だった。これに関連した者は思想犯ないし左翼犯と呼ばれた。以下、左翼犯と称する。なお「左翼犯」等の用語はカギ括弧を外す。

(3) 正確な保連員数については未だに不明であるが、推測できる根拠としては、保連設立に深く関わった鮮于宗源の回顧録では全体の保連員数は三十三万人だと書いている。一方、一九五〇年六月五日に開かれた保連一周年記念式及び脱盟式では「全国十萬保導連盟員」と書かれている（鮮于宗源『思想検事』増補版、啓明社、二〇〇二、一七二頁、『京郷新聞』一九五〇年六月六日）。

(4) 「皇道宣揚」の意味は「天皇中心の政治を天下に広く掲げ示すこと」であり、「内鮮一体」は「日本と朝鮮を一体にすること」であるが、「朝鮮人を忠良な皇国臣民となし、日本と運命を共にすること」が実態である。糟谷憲一他著『朝鮮現代史』山川出版社、二〇一六年、一六一頁。

(5) 時局対応全鮮思想報国連盟「時局対応全鮮思想報国連盟一覽」一九三九、三、九—十頁。

(6) 実際に、保連の最高指導委員の中の一人である鮮于宗源の証言によると保連のモデルは「大和塾」であったという。鮮于宗源証言、真実委「二〇〇九年下半年報告書」

七卷、三四一頁。林鐘国『日帝下の思想弾圧』平和、一九八五、一九七—一九八頁。

(7) 財団法人光州大和塾「財団法人光州大和塾要覧」『日本ファシズム期韓国社会資料集』三卷、五二五—五二六頁。

(8) 한지희 「국민보도연맹의 결성과 성격」淑明女子大学史学科修士学位論文、一九九五。

(9) 김전호 「국민보도연맹사건의 과정과 성격」慶熙大学史学科修士学位論文、二〇〇二。

(10) 정병준 「한국전쟁초기 국민보도연맹원예비검속·합살사건의 배경과 구조」『歴史と現実』第五四冊、二〇〇四。

(11) 강성현 「한국 사상 통제 기제의 역사적 형성 과 보도연맹 사건, 1925~1950」ソウル大学博士學位論文、二〇一二。

(12) 真実・和解に向けた過去事整理基本法により作られた組織である。正式名称は、「진실·화해를 위한 과거사정리위원회」である。二〇〇五年一月一日に作られた委員会会で、独裁政権と朝鮮戦争など反民主的または人権侵害と暴力・虐殺・疑問死事件などを調査し、真実を明らかにするため作られた韓国の国家機関であった。(二〇一〇年一月二三日解散)。

(13) 例えば、蔚山地域における保連事件の場合、蔚山警察署で発掘した資料「処刑者名簿」、「左翼出所者名簿」、「要警戒人名簿」、「左翼系列者名簿」、「保導連盟員名簿」な

- どこの資料は一般人が手に入れるのは不可能に近いと思われる)をもとに、蔚山地域だけで二〇〇頁に及ぶ報告書を作成した。一方、慶南泗川地域の場合は、資料が主に証言に限られたため、報告書は三〇頁にとどまった。眞実委「二〇〇七年下半年報告書」三卷、八一七頁、二〇〇九年下半年報告書」五卷、三四九頁。
- (14) 김주완 『보도연맹원 학살과 지역사회의 지배구조』 경남마산지역의 사례와 인물을 중심으로 『歴史と境界』 五六号、二〇〇五。
- (15) 本来であれば、全地域の保連について同様の分析をする必要があるが、さしあたり、対象を限定する。それ以外の地域は今後の課題としたい。なお、慶南・釜山地域を中心とした研究成果は金ギジンの研究がある。これは、慶南・釜山地域の各種新聞・国会速記録・遺族会活動が盛り込まれた資料の性格が強い研究である。特に、慶南の各地域の虐殺被害者遺族と生存者の証言などが目立つ。虐殺事件の米国の事前認知を裏付ける米国の国立公文書など、そして朝鮮戦争期、釜山刑務所囚人虐殺事件の状況を把握できる資料も含まれている。김기진 『끝나지 않은 전쟁』 국민보도연맹』 歴史批評社、二〇〇二。
- (16) 朝鮮戦争勃発後、保連員・要視察人など、犯罪を犯すと予想される人を事前に拘束した。
- (17) 朝鮮総督府の『支那事变功労者功績調書』や韓国政府の人事発令文書など、主に人物を追えるために個人の人事記録を中心に参考する。
- (18) 『朝鮮日報』と『東亜日報』は、植民地期に創刊された朝鮮語新聞である。『京郷新聞』は一九四六年一〇月六日に創刊された。『京郷日報』という名称を選んだのは、日本によって廃刊された週刊『京郷新聞』(一九〇六年一〇月一九—一九一〇年一二月二〇日)を祖国の解放とともに再び生かすという意志を反映したものであった。『民主衆報』は、創刊日が一九四五年九月二四日である。中立紙を標榜したが、米軍政は左翼紙と認識していた。『釜山日報』は、植民地朝鮮でも『釜山日報』という名称で発刊されていたが、米軍政下で一九四六年九月一日に創刊され、政治的に中立紙を志向していた。朝鮮日報社『韓国新聞通鑑』二〇〇一、二〇三二—二〇四、三三一—三三二頁。釜山直轄市編纂委員会『釜山市史』第四卷、釜山直轄市、一九九一、五四四、五四七、五五二—五五三頁。
- (19) 麗順事件の際には、軍隊内での左翼粛清が始まり、一九四九年七月まで四七四九名が犠牲性となった。国防部戦史編纂委員会『韓国戦争史一解放と建軍』一九六七、四九六頁。

- (20) 国家保安法、第一条は次の通りである。「憲法に違反し、政府を僭称するか、それに付随して国家を騒乱する目的または政府を僭称し、変乱を引き起こす目的で結社・集団を構成・加入した者を処罰する。一、首魁と幹部は無期、三年以上の懲役または禁固に処する。二、指導的任務に従事した者は一年以上十年以下の懲役または禁固に処する。三、その情を知って、結社または集団に加入した者は三年以下の懲役に処する」。国家法令情報センター <http://www.law.go.kr/lsInfoP.do?lsiSeq=7221&anYd=19481201&ancNo=00010&efYd=19481201&nw10YnInfo=N&efGubun=Y&chClsCd=010202#JAX> 二〇一六年一〇月二七日閲覧。
- (21) 박인준 『국가보안법연구』一卷、歴史批評社、一九八九、三頁。真実委、前掲、七卷、三三五頁。
- (22) 真実委、前掲、七卷、三〇八頁。
- (23) 国家保安法の実務提要によると「不法団体」に加入したことがある者は国家保安法による処罰対象となっていた。したがって、以下の団体に加入した者は対象とされる。南朝鮮労働党・朝鮮労働組合全国評議会・民主主義民族戦線・朝鮮民主愛国青年同盟・朝鮮教育者協会・朝鮮民主学生連盟・全国農民連盟・南朝鮮民主女性同盟・朝鮮文化団体総連盟・朝鮮協同組合中央連盟・反日運動

- 者救援会などの結社、あるいは上記結社に加入した各部門の傘下団体、または同結社級団体の再建の準備と指導するための集団。吳制道『国家保安法の実務提要』改正増補版、ソウル地方檢察庁、一九五一、五一―五三頁。
- (24) 『慶南道民日報』2001/6/14。真実委、前掲、七卷、三七四―三七五、三七八頁。
- (25) 真実委、前掲、七卷、三七八―三七九頁。
- (26) 真実委、前掲、七卷、三四八頁。
- (27) 김기진 『한국전쟁과 집단학살 - 미국기밀문서의 최초증언』 푸른역사, 二〇〇五, 二〇頁。
- (28) subject: National Guidance Alliance, NARA LM 176, R eel 12, 김기진, 同上書, 二一六頁。
- (29) 民族陣營側一〇人、軍や警察側五人、左翼側一五人の準備委員会構成で正式の発起人大会を開催。『民衆』49/11/12。
- (30) 慶南・釜山地域保連の幹部構成員については、史料の制約から、経歴等を明らかにできなかった人物もいる。慶南保連の場合は、宣伝部長 権一、組織部長 チョン・ホイル(진호일)、財政部長 田昌浩、事業部長 李ソンチユル(이성호)、婦女部長 崔小男の経歴は追えなかった。釜山地域の場合には、理事や幹事長の経歴は大体が追えるが、それ以外の役に就いた人々は明らかにできなかった。



生没に関しては把握できた人に限ってその旨を表記する。

(31) 慶南警察部『高等警察関係摘録』一九三六、三五頁。

(32) 一九三〇年に書かれたとみられる彼の刑務所における回顧録では、彼は濡れ衣を着せられ収監されたと表現している。しかし、『高等警察関係摘録』では、独立運動資金集めの疑いで逮捕されたと記載されており、これに対して彼の回顧録では朝鮮総督府の爆弾事件の疑いで逮捕されたと語っている。実際に崔喆龍は、独立運動資金集めの疑いで逮捕されたが、一九二一年九月一二日に起きた朝鮮総督府爆弾事件と関連した人物と縁があつて、取り調べられたと考えられる。崔喆龍「十年前、爆弾事件連坐投獄者の回想記」鉄筆、第一巻三号、一九三〇『鉄筆・一九三〇—一九三一』寛勲クラブ信永研究基金、一九九二年、五七、六二、六八頁。国史編纂委員会『韓民族独立運動史資料集二八、義烈闘争一』一九九六、[http://db.history.go.kr/id/hd\\_028r\\_0020\\_0030](http://db.history.go.kr/id/hd_028r_0020_0030)、二〇一六年一〇月二六日閲覧。

(33) 『東亜』27/7/13 12/7。新幹會本部通文の件『国内抗日運動資料』京城地方裁判所検事局文書 [http://db.history.go.kr/id/had\\_144\\_0650](http://db.history.go.kr/id/had_144_0650)、二〇一六年九月三〇日閲覧。

(34) 韓民会は馬山で建準が進歩的路線の方に徐々に変わっていく中、建準から脱退した右翼団体である。以降は、大韓独立促成國民會(右翼系の政治団体)の馬山支部になる。馬山市編纂委員会『馬山市史』一九九七、二〇八頁。

(35) 崔喆龍の警察官としての経歴は次の通り。釜山中警察署長(一九四七年九月一八日〜一九四八年一月三日)、河東警察署長(一九四八年五月一〇日〜一九四九年四月一六日)、慶南道警察局長(一九四九年六月一三日〜一九五〇年四月二六日)、『釜山』四九年七月三〇日付。内務部治安局『韓国警察史』二巻、一九七三、一三九二、一三九四、一四〇〇頁。

(36) 政府樹立後、警察幹部候補生一期から三期までの名簿を確認してみても彼の名前はなかった。したがって、彼は韓国政府樹立後の正式警察幹部試験を通じて登用されていないと思われる。内務部治安局、前掲、一九七三、一四〇九—一四一三頁。

(37) 辛泳柱(重光泳柱)の植民地期や韓国における経歴は次の通り。慶南昌寧郡南旨面出身、一九三七年一月警察試験合格、一九三九年六月巡視部長試験合格、一九四一年警部試験合格、巨濟警察署巡查部長(一九四〇)、東萊警察署司法主任(一九四四年八月〜一九四五年八月一五)、固城初代警察署長(一九四五年一月〜一九四六年一〇

月)、統營警察署長(一九四六年十月～一九四六年一月)、晋州警察署長(一九四六年一月～一九四七年一月)、慶南警察局長(一九四七年一月～一九五〇年五月、一九五〇年七月～一九五〇年九月)、釜山東部警察署長(一九五〇年五月～一九五〇年七月)、忠清道警察局長(一九五三年一月～一九五四年三月)、自由党所属で政治家として活動(一九五四)、慶南昌寧郡選挙区から立候補。第四代国会議員無所属(一九五八年五月～一九六〇年七月)昌寧郡選挙区選出、第六代国会議員民主共和党(一九六三年一月～一九六七年六月)昌寧郡。内務部治安局、前掲、一九七三、一三六三、一四〇二頁。朝鮮警察協会『朝鮮総督府警察職員録』一九四三、一六三頁。辛泳柱『구름속에 한송이 빛』三寶文化社、一九七七、五八、六〇、六四頁。『京郷』1952/3/8、53/10/29、54/4/15、5/9。『南朝鮮民報』50/7/21。

(38) 韓国憲政会のウェブサイトに於いては、彼の死亡年月日は一九七七年一月七日と書かれているが、各新聞では一九七七年一月十七日午後三時、自宅で死亡したといふ。http://rokps.or.kr/profile/profile\_view.asp?id=x=1163&page=1、二〇一六年一月二十九日閲覧。韓国憲政会は元国会議員を中心とした政策開発などを目的とする団体である。『京郷』77/12/19。『東亜』77/12/19。『朝

鮮』77/12/18。

(39) 박철규 『해방직후 통영면의 사회운동』『地域と歴史』第一号、釜慶歴史研究所、一九九六、一六八頁。

(40) 辛泳柱、前掲、三寶文化社、一九七七、六四一六七頁。『京郷』46/10/6。

(41) 朝鮮戦争中、民間人集団虐殺事件の真相究明に向けて地域別に遺族会が作られ、遺族たちの被害届出を受け、加害責任者を告訴するなどの運動を積極的に進めた。遺族らが作った合同墓地や慰霊碑は、一九六一年五・一六クーデター以降破壊された。さらに遺族会の幹部たちは、拘束された。真実委、前掲、五卷、二二二頁。

(42) 辛錫信『辛氏墓先録』辛氏中央宗親会、一九六八、二二二頁。

(43) 辛泳柱、前掲、三寶文化社、一九七七、七四頁。

(44) すでに述べたように『韓国警察史』によると、彼は、一九四七年から戦争が起きる直前一九五〇年初まで慶南警察局長として勤務する。そして、釜山刑務所ないし慶南地域の保連員に対する虐殺が起る時期、東部警察署(一九五〇年五月～一九五〇年七月)、慶南警察局長(一九五〇年七月～一九五〇年九月)として二ヶ月間勤務したことからみると、彼が虐殺について知らなかったとは言えないであろう。

- (45) 前掲『釜山市史』第四卷、五四四―五四五頁。盧百容は、新聞（『人民解放報』、一九四五年一〇月八日創刊、一九四七年一〇月八日廃刊）発行者になるが、『釜山市史』では『人民解放報』に対し、左翼新聞として分類している。また、米軍の報告にも当時の新聞に対するイデオロギー性向の分析がある。米軍の情報報告によると『人民解放報』に対する政治的性向は疑問符になっており、米軍政の直接的な、『人民解放報』に対する認識はわからない。しかし、『釜山市史』では盧百容の『人民解放報』を左翼紙、『民主衆報』を中道紙だと分析している。一方、米軍政は『釜山市史』が中道紙であると評価した『民主衆報』に対しては極左紙(extreme left)と分類している。これを基にして推測してみれば米軍政は『人民解放報』を極左以上だと考えていたに違いない。釜山日報社『釜山日報五十年史一九四六―一九九六』釜山日報社、一九九六、一四一頁。HQ USAFIK G-2 Weekly Summary No82 1947.3.30-1947.4.6『駐韓美軍週刊情報要約』三巻、翰林大学アジア文化研究所、一九九〇、二五―二六頁。
- (46) 彼は青少年を対象に講演をするなど、「文盲退治」のための夜学活動にも関心を持ったようだ。『東亜』21/6/19、123/8/18、27/5/13。
- (47) 副委員長に姜大洪が選出される。『民衆』46/2/2。
- (48) 新聞に事件の経緯について書かれていないが「僭称」という単語が書かれていたことから考えてみると、人民委員会の活動を称するのではないか思われる。『東亜』46/2/18。
- (49) 尹一の経歴は、慶尚南道巨濟島出生、三・一運動運動時、巨濟島における運動の指導で一年服役、ソウル青年会加入、一九二七年朝鮮共産党加入、慶尚南道道幹部就任、一九二八年朝鮮共産党中央委員就任、一九二八年八月被検、五年服役、一九四四年巨濟島、釜山等地で地下運動展開中発覚し、満州亡命、一九四六年朝鮮共産党慶尚南道道統制委員長、慶尚南道民主主義民族戦線議長。朝鮮通信社『朝鮮年鑑』一九四七、二六八頁。
- (50) 尹は慶南人民委員会で委員長として活動するなど、左翼系における影響力のある人物だった。副委員長は盧百容であった。40th Infantry Division G-2 Periodic Report, no. 2 (26-27 Sept 1945) no. 24 (18-19 Oct 1945) 慶南大学校極東問題研究所『地方米軍政資料集』一巻、景仁文化社、一九九三、四四一―四四二、五六三―五六四頁。
- (51) 高性華の略歴は以下の通り。一九一六年八月二〇日濟州島牛島(ウド)出生、一九三四年八月一〇日大阪浪華高等商業学校五年中退、一九四五年一〇月帰郷後、朝鮮共産

- 「党の牛島責任秘書兼面常任委員、一九四七年四月一五日米軍政の人民弾圧により釜山へ脱出、釜山地区党宣伝役、釜山地区党責任秘書、釜山地区党責任書記（一九四七年―一九四八年釜山市党）一九四九年六月二五日逮捕、二年刑、一九五一年四月一〇日出所、一九五五年四月日本へ行く、一九六八年一〇月北朝鮮の指導部から呼び出され、北朝鮮に移動、一九七三年三月一六日韓国で逮捕、一九九三年三月六日刑執行停止出所、二〇一三年七月一七日死亡。高性華は一九四九年六月釜山で逮捕され、釜山刑務所に収容されたが、幸運にも処刑されなかった。彼の経歴から見ると彼は戦争中虐殺対象になるに十分な経歴を持っていた。正確な理由は分からないが、刑期が二年だったことが理由ではないかと思われる。高性華の証言によると釜山刑務所では三年刑以上の刑を受けた人が処刑された。고성화 『나의 비망록(애국의 길)』 한울사, 二〇〇一、一四二頁。
- (52) 「韓国歴代人物総合情報システム」では、盧百容は一九六一年八月一三日に死亡したという。 [http://people.aks.ac.kr/Front/tabCon/ppl/pplView.aks?ppId=PPL\\_7HI\\_L\\_A1885\\_L\\_0026638](http://people.aks.ac.kr/Front/tabCon/ppl/pplView.aks?ppId=PPL_7HI_L_A1885_L_0026638) 二〇一六年七月一五日閲覧。
- (53) 彼が刑務所収監中、連続的に共産党事件関連で逮捕された人々の健康関連の記事が出ている。また、『中外日報』

一九三〇年五月一〇日の記事では、姜大洪の病気がさらに深刻になっていると書かれている。思想関連事件で収監された者の体調の状況が連日新聞に記載されたことを考えて見れば、事件の重要性、あるいは関連した人が影響力のある人だと思われる。『中外日報』三〇年五月一〇日付。『東亜』三〇年一月八日付、九日付、三二年一月九日付。

- (54) 一九四五年建準慶南指導部は、委員長盧百容（慶南保連幹事長、総務部長姜大洪（慶南保連事務局長）、宣伝部長朴日馨（釜山南区保連幹事長兼総務部長）、括弧内は保連における役割。40th Infantry Division, G-2 Periodic Report, no. 2(26-27 Sept 1945)（前掲『地方米軍政資料集』一卷、四四一―四四二頁）。

(55) 釜山における治安隊は、釜山地域の軍需工場で働いた若者たちが独自の警備のために乗り出したのが始まりだという。一九四五年九月一六日、釜山に米軍が上陸するとともに、治安隊が日本人から押収した兵器と物資を米軍に渡し、自然に解体される。釜山文化宣揚会『釜山総鑑』一九八八、六七頁。

(56) 『民衆』45/12/31。「信託統治排撃委員会」は左翼と右翼が一緒に組織した団体である。しかし、この団体は、イデオロギーと独立国家への認識の違いで分裂する。左翼

は「信託反対釜山市人民委員会」、右翼は「信託統治反対国民総動員釜山市委員会」に分れる。『民衆』46/1/9、13。のちに「信託反対釜山市人民委員会」は、「無原則の信託統治反対を三〇万市民に提唱した過去を自己批判」をしながら、信託統治賛成の路線に変える。釜山において一九四六年一月二十七日に行われた米・ソ代表団歓迎大会に姜大洪が参加しており、盧百容は「三相会談を絶対支持して、自主独立に邁進していこう」という。『民衆』46/1/28。

(57) 고성환, 前掲, 한울사, 二〇〇一, 一四二, 一四五—一四六頁。

(58) 姜大洪の名前に関する息子の証言を裏付ける史料として、姜大洪が西大門刑務所で投獄中撮った写真と彼に関する書類がある。書類上には、彼の名前が姜大洛となっているため見逃しやすいが、写真の中に彼が着ている服には姜大洪となっている。彼がどのような理由で本名ではなく異名を使ったのかはわからない。西大門刑務所『姜大浩・日帝監視対象人物カード』一九三〇、韓国国史編纂委員会, <http://library.history.go.kr/dhrs/dhrsXIFViewer.jsp?system=dlldb&id=SI0000002317>, 二〇一六年一月三〇日閲覧。

(59) 成樂明(総務部長)：人民党釜山支部委員、馬山市巡回講

演会(一九五〇年一月一八日)で保連啓蒙活動の講演会で講演。『民衆』45/12/30。『南朝鮮民報』50/1/18。韓国史データベース、職員録資料, [http://db.history.go.kr/id/ngpn\\_1950\\_01\\_18\\_y0002\\_0330](http://db.history.go.kr/id/ngpn_1950_01_18_y0002_0330), 二〇一六年六月七日閲覧。林純也(保導部長)：社会党入党準備委総務委員『釜山』49/4/5。趙大順(訓練部長)：大韓独立促成全国青年総連盟の慶南支部事業部長、朝鮮民族青年団影島区団長。建国青年運動協議会総本部『大韓民国建国青年運動史』一九八九、六七〇、一一三六頁。

(60) 特に盧百容は、二〇〇八年八月一日、建国褒章を追叙された。叙勲の理由は植民地朝鮮における抗日独立運動であった。彼は建国褒章追叙されるほど国家に献身した人物であった。勲章の授与が遅れた理由は、韓国社会において左翼に対する偏見に満ちた認識や朝鮮戦争の経験の影響が大きかった。行政自治部『大韓民国の叙勲』<http://www.sanghum.go.kr/nation/participation/sangopen/sangInfoOpen.do>, 二〇一六年六月八日閲覧。

(61) 고성환, 前掲, 二〇〇一, 一四二頁。

(62) 真実委の報告書では申在洙になっていたが、『釜山』49/12/25日の新聞では申在鉉となっていた。真実委前掲、七卷、三三三頁。『釜山』49/12/25。

(63) ソ連軍政文書、口頭情報報告, No. C-23, 一九四六年四

月一七日、ロシア連邦国防省中央文書保管所、文書群17  
2、目録6146、文書綴12『南朝鮮情勢報告書一九四六〜  
一九四七』国史編纂委員会『海外史料叢書』六卷、二〇  
〇三、七四頁。

(64) 고승화, 前掲, 한울사, 二〇〇一, 一四二頁。

(65) 田文淳(吉田文淳)は、植民地朝鮮で黄海道・黄州・甕津  
・金川で警察官として活動し、軍需物資供出でその功勞  
を認めてもらい、功績調書に名前が載せられる。解放後  
には、一九四七年濟州道、一九四九年慶南忠武・密陽、  
一九五〇年釜山影島警察署、一九五三年に再び濟州道で  
勤務する。内務部治安局、前掲、一九七三、一三九五―  
一三九八、一四〇二頁。朝鮮總督府、前掲、一九四〇、  
国家記録院、CTA0003263。『毎日申報』28/7/10<sup>6</sup> 8/25<sup>6</sup>  
31/3/19<sup>6</sup>。

(66) 『中外日報』30/1/10。

(67) 京城地方裁判所検事局文書に朴日馨に対する裁判記録が  
残されている。『朝鮮共産党再建同盟事件発覚に関する  
伴』一九三三年一〇月一六日『朝鮮共産党再建同盟事件  
発覚に関する伴』一九三四年二月七日、韓国史データベース  
『国内抗日運動資料』[http://db.history.go.kr/id/had\\_156\\_0380](http://db.history.go.kr/id/had_156_0380)  
[http://db.history.go.kr/id/had\\_157\\_0270](http://db.history.go.kr/id/had_157_0270)、二〇一六年六月一〇日閲覧。『東亜』31/5/19<sup>6</sup> 3

3/10/2。

(68) 一九四五年二月五日に創刊し、一九四七年八月二〇日  
に停刊となる。一九四九年一〇月一日に『釜山日報』  
へ合併した。釜山直轄市編纂委員会、前掲、第四卷、一  
九九一、五五〇頁。

(69) 『東亜』28/7/13<sup>6</sup> 8/15<sup>6</sup> 29/3/13<sup>6</sup> 10/19<sup>6</sup>。『中外日報』3  
0/1/10<sup>6</sup> 4/8<sup>6</sup>。

(70) 韓国史データベース「朝鮮革命党関連事件、金命龍の尋  
問調書」、『韓民族独立運動史資料集』[http://db.history.go.kr/id/hd\\_044r\\_0020\\_0010\\_0250](http://db.history.go.kr/id/hd_044r_0020_0010_0250)、二〇一六年六月  
一〇日閲覧。『東亜』32/10/5。

(71) 新聞資料だけで事件の性格を知ることができないが、新  
聞によると東萊警察署の高等警察係刑事を総動員して検  
束、逮捕したという。李永錫の活動から見れば、思想関  
連の件で逮捕や拘束を繰り返されたと思われる。『朝鮮  
中央日報』33/5/8<sup>6</sup> 11/15<sup>6</sup> 12/9<sup>6</sup> 34/1/1<sup>6</sup>。

受稿

二〇一八年五月二三日  
二〇一八年十一月二日

レフェリーの審査  
を経て掲載決定